

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：34311

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00760

研究課題名（和文）図画工作科との連携による外国語教育授業における児童の発達に関する研究

研究課題名（英文）A Study of Children's Development in Foreign Language Education Classes in Association with Arts and Crafts

研究代表者

岩坂 泰子（Iwasaka, Yasuko）

同志社女子大学・現代社会学部・教授

研究者番号：80636449

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：前半は、理論構築を試みた。成果は、岩坂らによる口頭発表（2019）及び分担者藤井康子氏との協働実践を口頭発表（2019（2本）、2020）と論文（2021、2022）で発表した。岩坂の博士論文（2022）では独自の理論を整理し、その枠組みに依拠してこれまでの協働実践事例を考察した。後半は、統合理論に依拠した小学校全ての学年の発達段階に応じた内容の授業を計画実践した。実践の成果は、報告書として取りまとめ、分担者らと共に実施した学校関係者及び研究者に向けた報告会（2024.2.17）で配布した。総括として、投稿した論文は、『関係性の教育学会』Vol.23（2024）に採択された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義及び社会的意義は、言語と非言語を別々のものとしてではなく、お互いに補完し、相乗的に個人の能力を引き出すものと捉え、マルチモダリティという理論を基盤とした統合理論を打ち立てたことにある。外国語という言語知識が母語による教科に比べてかなり少ない教育活動を行う際、言語によるパフォーマンスに注目するだけでなく、非言語によって発現される言語意識向上の過程や実態を分析、考察の射程に含めることによって、学習者の意図をより正確に捉えることに成功し、結果として学習者の学習に対する動機づけに対するアプローチが可能となるという教育的示唆を得られたことは成果として特筆すべきであろう。

研究成果の概要（英文）：In the first half of the project, we attempted to construct the theory. The results were presented in oral presentations by Iwasaka et al. (2019) and collaborative practices with my coauthor, Yasuko Fujii, in oral presentations (2019, 2020) and papers (2021, 2022). In Iwasaka's doctoral dissertation (2022), I organized my original theory and discussed past collaborative practice cases relying on the framework. In the latter half of the project, I planned and implemented lessons with developmentally appropriate content for all grades of elementary school, relying on the integration theory. The results of the practice were compiled as a report and distributed at a debriefing session for school personnel and researchers (February 17, 2024), which was conducted together with the project members. In summary, the submitted paper has been accepted for publication in the Journal of Engaged Pedagogy, Vol. 23 (2024).

研究分野：初等外国語教育

キーワード：初等外国語 図画工作 連携 社会文化理論 マルチモダリティ 言語意識

1. 研究開始当初の背景

外国語教育における社会文化的視点による先行研究から得られる言語と芸術の関係に関する理論的枠組みとして、本研究の枠組みの骨格となったヴィゴツキーの心的発達、特に媒介の概観に着目した理論および実践事例を含む先行研究を整理した（岩坂ほか、2018）。また、この枠組みの理論を実証するため、小学校外国語活動の中で社会文化理論の枠組みを用いた実践を試行し、実践研究論文として報告した（岩坂、2018）。しかし、言語と同時に、絵やイラストなどの非言語の一体化がどのように学習者の外国語の発達を媒介するのかについては未開拓であり、さらなる理論構築と図画工作科と連携させた外国語の実践事例が求められていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ヴィゴツキーの発達心理学、中でも「媒介」の概念およびヴァン・リアの生態学的な言語発達理論に依拠し、初等外国語学習開始期の認知機能と感情の相互作用に着目した図画工作科の連携、統合授業を通して、児童の学習プロセスを考察することである。

3. 研究の方法

【理論的枠組み】

本研究で構築した社会文化理論とヴァン・リアの社会文化的「生態学的」な言語観と密接に関連しているマルチモダリティ理論を融合させた独自の枠組みを用いる。

【実践】

3.1 過去に行った実践事例（岩坂、2018）をこの枠組みで再考察する。

3.2 分担者と共に図画工作科と外国語活動の連携で発案した実践を図画工作科からの効果検証（藤井ほか、2021）したものを、本研究の枠組みで考察をする（Iwasaka、2022）

3.3 マルティモダリティ理論により深く依拠した活動として、言語（外国語）と色・形・配置などの非言語を同等のモードとして一つの作品の中に統合させた活動を考案し、小学校の全学年で実施する（岩坂、2024）

【考察の方法】

本研究の考察の枠組みとして用いたのは、言語（外国語）と色・形・配置などの非言語を同等のモードとして扱うマルチモダリティ理論に依拠したクレスのマルチモーダル・ディスコース分析（MMDA）の手法である。特に着目するのは、ヴィゴツキー由来の社会文化理論の中でも新しい領域である学習者の情意面（ペレジバーニエ（感情的体験）：ヴィゴツキー）である。学習者の作品及びパフォーマンスのプロセスにおいて、ペレジバーニエはなぜ、どのように発現したのかについて、言語と非言語のモードが学習の場を共にする主体がどのように媒介したかを考察し、そこから導かれる意義と教育的示唆をまとめる

4. 研究成果

本研究の成果は以下のとおりである。

実践事例の考察の枠組みとなる理論として、部分ではなく全体の関係性を媒介の概念を中心に据える社会文化理論にマルチモダリティ理論を組み込む統合理論を構築した。この新しい理論的枠組みによって、これまで見えにくかった児童の学習・発達のプロセスを可視化できる。

学習者主体は主体が置かれた環境との相互作用の中で心的発達を遂げる。発達に必要な「利用可能なリソース」は、主体と環境にそれぞれ分散されている。それらをつなぎ、関連させて主体である学習者は「利用可能なリソース」を更新し続ける（＝発達）。それを媒介するのが、学習者（自）と他（教師や仲間）の「間」に出現する「最近接発達領域（ZPD）」（ヴィゴツキー）そして、ZPDを作る活動である。

この理論構築については iwasaka (2022) を参照のこと。Iwasaka (2022) では、この理論的枠組みによって、岩坂 (2018) および藤井ほか (2021) をこの統合理論によって再考察し、教育的示唆を導いている。図1は iwasaka (2022) の統合理論を図式化したものである。

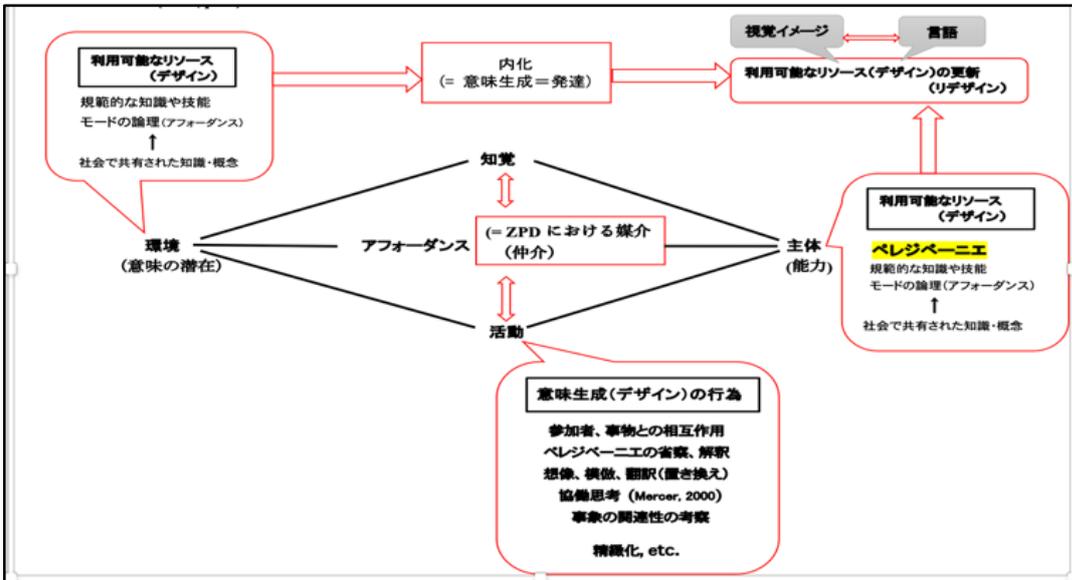


図1

Iwasaka (2022)の理論的枠組みを発展させて開拓した研究テーマは、日本の外国語教育の目標として明示されている言語意識の向上に感情あるいは感情的体験がどのように関係するのかに着目した実践の開発である。社会文化理論は主に北米の第二言語習得研究 (SLA) の中で発展してきた議論であるのに対して、言語意識の概念は欧州の外国語教育において議論されてきた。しかし、SLA 研究においても、欧州の外国語教育政策の議論においても、従来、言語習得は知性主導の認知活動のみに着目した研究が支配的であった。社会文化理論は 1990 年以降、従来の認知偏重主義的言語習得理論の中に感情がどのように認知活動を媒介 (促進) するかを実証するための理論的基盤として実践研究が重ねられてきた。本研究は、岩坂 (2024) の中で、iwasaka(2022) で描いた統合理論を援用し、従来、認知活動にのみ着目されてきた言語意識向上のプロセスに感情が寄与する媒体として言語発達における身体性の重要性を説いた (図 2)。

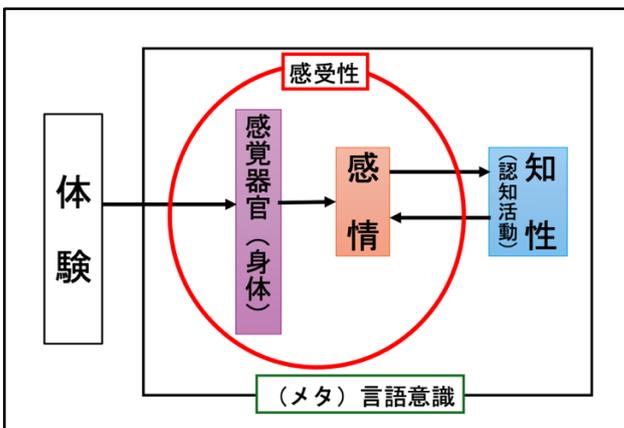


図2

コロナ禍を経て 2023 年度、岩坂は、言語の身体性に着目した初等外国語の学習・発達に向けて、1 年～6 年までの各学年の発達段階を考慮した絵と言葉を組み合わせた表現活動案を「英語でアート」(<https://www.artinenglish.net/projects>) という団体の協力を得て考案し、公立小学校で実践した。各学年の表現活動は以下の通りである。これらの実践における表現活動ではいずれも非言語による表現の中に言語モードによる表現活動 (= () 内の表現活動) を埋め込んだ。

- 【第1学年】 大好きな生きもの (生きものたちが出す音)
- 【第2学年】 見たこともない魚たち (スイミーを元気にするメッセージ)
- 【第3学年】 色と音の街 (私の建物から出る音)
- 【第4学年】 1/2 成人式 (できるようになったこと)
- 【第5学年】 シンメトリーな仮面 (わたしのモットー)
- 【第6学年】 生命の樹 (わたしの大切なもの)

考察にあたり、社会文化的視点、マルチモーダルな視点に加え、今井・秋田（2023）が近著『言語の本質』の中で着目した言語発達に不可欠な「記号接地」の概念から導かれるオノマトペの普遍性の視点を加え、1年生の作品の考察を試み、教育的示唆をまとめた。また、この一連の表現活動の実践は、2024年2月、報告会の場を設け、すべての分担者にコメンテーターとして参加していただき参加者と共に検討、本研究のまとめとした。（なお、参加者には一連の活動報告書（全73ページ）を配布した。）

<参考文献>

- 岩坂泰子・横田和子. (2018). 「社会文化的視点による小学校外国語教育の可能性—『媒介—手段—を用いて—行為する—個人』を分析する意義」『関係性の教育学』Vol.17.51-59.
- 岩坂泰子. (2018). 「社会文化理論に基づく児童の語彙学習の分析—<share>の『意味』と『感覚』—」『小学校英語教育学会誌』Vol.18. 132-147.
- 藤井康子・東奈美子・岩坂泰子. (2021). 「図画工作科と外国語活動を軸とした教科融合型学習の開発と実践—6年生の My Best Memory を絵に表す活動を通して—」『美術教育学研究』第53号.209-216.
- Iwasaka Yasuko. (2022). *Studies of Japanese Elementary School Pupils' Foreign Language Development: Integrating Multimodality into Sociocultural Theory.*
兵庫教育大学 博士論文.
- 今井むつみ・秋田喜美. (2023). 『言語の本質—ことばはどう生まれ、進化したか』中央新書
- 岩坂泰子. (2024). 「絵と言葉を組み合わせた表現活動が拓くこどものメタ言語意識—言語の身体性に着目した初等外国語の学習・発達に向けて」『関係性の教育学』Vol.23.129-142.
- 岩坂泰子（監修）. (2024). 『アート x ことばのアクティブ・ラーニング—創作を軸にした小学生のワークショップ実践集』（報告書）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 藤井康子・岩坂泰子・樋口和美・水城久美子	4. 巻 43
2. 論文標題 図画工作と外国語活動の融合型授業の開発と実践の考察 -アルファベット文字の形と音から主題を生み出す絵に表す表現-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 美術教育学	6. 最初と最後の頁 173, 188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤井康子・東美奈子・岩坂泰子	4. 巻 53
2. 論文標題 図画工作科と外国語活動を軸とした教科融合型学習の開発と実践 -6年生のMy Best Memoryを絵に表す活動を通して-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『美術教育学研究』	6. 最初と最後の頁 209-216
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹内晋平・塩田侑佳	4. 巻 52
2. 論文標題 鑑賞的体験の言語化を通じた美術の俯瞰的理解 - プロダクトデザインの鑑賞における発問設計とその効果を中心に -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美術教育学研究	6. 最初と最後の頁 217/224
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 横田和子, 岩坂泰子, 岡本能里子
2. 発表標題 ことばの教育をデザインするーSDGsのジェンダーの視点から
3. 学会等名 日本国際理解教育学会第30回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横田和子, 岡本能里子, 岩坂泰子
2. 発表標題 「聲にならない」をアートする - 「共に在る」ためのことば学
3. 学会等名 言語文化教育研究学会 第7回年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹内晋平
2. 発表標題 授業研究における撮影デバイス等の活用による造形活動の分析方法
3. 学会等名 第43回 美術科教育学会 愛媛大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横田和子、岩坂泰子、岡本能里子、佐藤仁美、當銘美菜
2. 発表標題 情動レベルに働きかける市民性教育の実践に向けて ことば・からだ・アートを融合させた難民問題へのアプローチ
3. 学会等名 言語文化教育研究学会 第5回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩坂泰子、横田和子、佐藤仁美
2. 発表標題 初等教育における教科教育者「間」の相互行為によるObchynie (教授・学習) の可能性
3. 学会等名 言語文化教育研究学会第5回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤井康子、東奈美子、岩坂泰子
2. 発表標題 図画工作科と外国語活動の教科融合型学習の開発 6年生での絵に表す実践の成果と課題
3. 学会等名 第58回 大学美術教育学会「岐阜大会」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤井康子、 岩坂泰子、 水城久美子、樋口和美
2. 発表標題 図画工作科と外国語活動の教科融合型学習の開発 - 3年生での絵に表す実践の成果と課題 -
3. 学会等名 第42回美術科教育学会千葉大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	吉田 達弘 (Yoshida Tatsuhiko) (10240293)	兵庫教育大学・学校教育研究科・教授 (14503)	
研究 分担者	竹内 晋平 (Takeuchi Shinpei) (10552804)	奈良教育大学・美術教育講座・教授 (14601)	
研究 分担者	藤井 康子 (Fujii Yasuko) (10608376)	大分大学・教育学部・准教授 (17501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------